第1章

ライフヒストリー研究の展開

1　ライフヒストリーのストーリー
——ライフヒストリー法の起源

ライフヒストリー法の起源を探ると、二〇世紀の初めに文化人類学者がアメリカ・インディアン酋長の自伝という形で最初のライフヒストリーを収集していることがわかる（たとえばBarrett 1906, Radin 1920）。それ以後、研究手法としての普及や受容には盛衰があったものの、ライフヒストリー法による研究は社会学者や、そのほかの人文科学で活動する研究者によって行われることが多くなった[(1)]。本書で指摘しているようにライフヒストリーやそのほかの自伝や語り（ナラティブ）を用いる手法が多くの成果をもたらすと考えられるようになり、教育研究においてもこうした手法が用いられるべきだというのが本章の主張である。しかしながらこの手法の研究上の来歴を辿ることで、これまでの社会学研究でいかにライフヒストリー法が用いられてきたのかを検討しなければならない。というのも社会学こそライフヒストリー法が発展してきた主要な「戦場」であったからだ。

社会学者にとってライフヒストリー研究発展の重要な画期は、トーマスとズナニエツキの壮大な研究『生活史の社会学——ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』（Thomas and Znaniecki 1918-1920）に続き、1920年代に訪れた。アメリカに移民したポーランド農民の経験を検証する際に、トー

(1) 日本でも女性やマイノリティの研究のほか、最近では教師、看護師、ソーシャルワーカーなどの専門職、企業家や経営者などについてライフヒストリー研究がさかんに行われるようになっている。

マスとズナニエツキは主に移民の自伝的記述を残された日記や手紙とともに使用した。この著者たちにとってライフヒストリーは社会科学者の最高のデータであり、ライフヒストリーがほかのどんな手法よりも有効である事例を示している。

> 個人の経験や態度を分析するとき、われわれはその人のパーソナリティだけに限られないデータや基本的事実にぶつかるのが常だ。それらは多少なりとも一般性を備えたデータや事実の集まりの例として処理できるし、それ故社会的生成の法則の決定因にも使うことができる。社会学的分析のための資料を引き出すのに、具体的個人の詳しい生活記録から引こうと、大量現象の観察から引こうと、いずれにしても社会学的分析に当たっての問題は同じ事である。ただ抽象的な法則を探求しているときでも、具体的なパーソナリティの生活記録にはほかのどの種の資料と比べても際立って優れた点がある。個人の生活記録をできるだけ揃えれば、それは完璧な社会学的資料となると言えよう。だから社会科学が仕方なくほかの資料を使わざるを得ないのは、社会学的問題の総体を覆い尽くすことができるような記録を、その時々に実際問題として十分入手できないという理由と、社会集団の生活の特徴づけに必要な個人的な資料をすべて適切に分析するには莫大な労力が必要だという理由があるためにほかならない。かりに大量現象を資料として、またある出来事をそこに参加した諸個人のライフヒストリーと関係なく已むを得ず使っているとすれば、そのことは現在の社会学的方法の欠点ではあっても利点ではあり得ない（Thomas and Znaniecki 1927, pp.1831-1833、訳書 88-89 頁）。

トーマスとズナニエツキの先駆的業績により、ライフヒストリーは正当な研究手法として確立された（ただしミラー（Miller 2000）が指摘しているように、その基礎はヴィルヘルム・ディルタイが述べた歴史主義の概念に見ることができる）。ライフヒストリーの傑出した地位は、シカゴ大学で、とくにロバート・パークが行った社会学研究の華々しい伝統によってさらに強化された。

パークの下で完成された数多くの都市生活研究では、ライフヒストリーの手法が大いに活用された。そうした研究としてはスラッシャー『ギャング』（Thrasher 1928）、ゾーボー『ゴールドコーストとスラム』（Zorbaugh 1929）、アンダーソン『ホーボー』（Anderson 1923）、そしてワース『ゲットー』（Wirth 1958）がある。しかし1930年代にクリフォード・ショウ『ジャック・ローラー』（Shaw 1930）やエドウィン・サザーランド『詐欺師コンウェル』（Cornwell and Sutherland 1937）が出版されたのが頂点であったろう。ショウの研究に対するハワード・ベッカーのコメントは、ライフヒストリーという手法の重要な長所について次のように指摘している。

> 知識人や社会学者の耳には通常届かない、文化や社会からのこうした声を聞くと、『ジャック・ローラー』が社会学理論をもっとも深いレベルにおいて証明していることがわかるであろう。つまり、スタンレーの間近にわれわれが身を置くことによって、普段頭の中に思い描く人々や、またわれわれが調査しようとする問題の当事者たちの人物像が、実は相当ゆがんでいることに気づくのである。実際にスタンレーの生活世界を追体験することによって、研究を計画する上で当然すべきだと考えていた（またそうすべきでないと考えていた）ことがなんであったかを考えはじめる。逸脱、スラム、ポーランド移民についていかなる仮説を立てるかは、問題設定の様式の中に組み込まれている（Becker 1970, p.71、訳書 13 頁）。

ベッカーの議論はライフヒストリー法のもっとも魅力的な特徴を指摘している。すなわちそれは知識人や社会学者には「わかっている」と一般に考えられていたことがライフヒストリーの資料によって砕かれてしまうことである。うまく用いられれば、ライフヒストリーはほかの人々の主観的な考え方と衝突せざるをえない。量的な指標や理論構築、すなわち統計表や理念型を求めているだけならば、この衝突は避けえるものであり、ほかの社会科学研究法では避けられることが多い。このことは社会学研究の中心領域であるべき人間の主観性との面倒な衝突を回避することである。こうした方法上での

回避の背後、あるいはその延長線上には、往々にして根深い実質的で政治的な回避が存在している。人間の主観性を排除すれば、量的資料による評価や理論による解釈により社会的・経済的秩序での権力者集団を容易に支持することになる。後で検討するように、権力者層を引き立て、さらに支持しがちなことは常に社会科学に潜む問題であり、ライフヒストリー研究を採用することでそうした問題に対する安全装置を働かせることができる。

「スタンレーの間近にわれわれが身を置くことによって」と述べることで、ベッカーはスタンレーの話が「非行少年の視座からの逸脱についての問いを立てる」(ibid. p.71、訳書 13 頁) ことを可能にすると断言している。それは権力をもった行為者の視点からではなく、専門家による審理で「裁決」される者の視点から発せられる問いを導き出す。つまり、方法論的な論争の問題はあるものの、それ以上にライフヒストリー研究が広がらなかった領域があったのはこうした理由による。

これまで「権力」は人々に奉仕してきたと言い張っていたが、ライフヒストリーはその性格上、「権力」が人々に「耳を傾けるように主張し、要求する。ベッカーは次のように述べている。

> スタンレーのいうことを真剣に受けとめるならば、彼の物語がわれわれに自然とそうさせるように、これまでほとんど研究されてこなかった一連の問題に注目するようになるだろう。それは非行少年を処遇する人々についての問題や、非行少年が用いる戦略についての問題や、非行少年の世界観についての問題や、非行少年が被る束縛や抑圧についての問題である (ibid. p.71、訳書 13-14 頁)。

しかしこの主張はクリフォード・ショー自身が序文で述べた「はじめの警告」に照らして読まれなければならない。そこでショーは読者に、唯一の事例の記録に基づいて非行の一般的な原因についての「結論を導くことのないよう」警告を発している。

ライフヒストリーという手法の方法論の基盤を分析したもっとも優れた試

みは、おそらくダラードの『ライフヒストリーの基準』(Dollard 1949) であろう。ベッカー以前に「個人の生活に関する詳細な研究は文化全体についての新たな視点をもたらすが、それは形式的な横断的観察だけでは到達できない」(ibid. p.4) とダラードは論じていた。ダラードの主張が聞き慣れた印象を受けるのは、おそらくそこにジョージ・ハーバート・ミードの影響が反映されているからであろう。ダラードは次のように論じている。

> 私たちが文化というレベルで観察者の立場になるやいなや、個人は群衆の中に消え、概念は決してその個人に立ち戻ることがなくなってしまう。「文化の中に消え去った」後、個人は (推論により作られた) 文化の様式(パターン)の断片となり、それは (再定義づけされた) 文化の形態(フォーム)という糸によって操られて踊らされる操り人形のようになる (Dollard 1949, p.5)。

これに対してライフヒストリアンは「ライフヒストリーの対象を一連の社会的な繋がりの結節点としてとらえることができる」(ibid. p.5)。こうした連鎖によりライフヒストリーの手法は社会学理論に非常に多く用いられ、とくに (後で検討するように) シンボリック相互作用論で多用される「現在中心主義(プレゼンティズム)」を修正することが可能になる。ダラードは歴史における過去、現在、未来に繋がるこの連鎖を次のように描写している。

> ある個人には以前にも結節点(リンク)があり、そこからその個人は現在の文化を獲得した。ほかの結節点もその個人が通り過ぎてゆく伝統の流れに従って続いていくだろう。ライフヒストリーはこうした過程の一部分を描こうとするものである。すなわちそれは歴史の連続性の中で複雑に構成された集団が営む生活という流れの一つについての研究なのである (ibid. p.15)。

ダラードは時代遅れの議論が多かったかもしれないが、「文化遺産」と呼ばれるものと、集団がもつ伝統と将来への期待の重要性、そして解釈し行動する個人独自の歴史と能力、それら相互に存在する緊張関係についての議論

でとくに優れていた。この緊張関係に焦点を当て、ダラードはライフヒストリーが文化、社会構造、そして個人の生活の間にある関係を明らかにする手法であると論じた。これはライフストーリーと社会的文脈（コンテクスト）について後に第5章で展開する議論と同様である。そこでは文化により作られた筋書き（ストーリーライン）によって社会構造と個人が衝突することを示している。こうしてダラードはもっとも優れたライフヒストリー研究を次のようなものだと考えていた。

> 状況は他者によって定義されると同時に、主観によって定義されることを念頭におく必要があり、ライフヒストリーはたんにこうした両局面を定義するのみでなく、公的な状況による圧力と、その状況を個人が内的に定義することによって生み出される力を私たちに明解に示すものである（ibid. p.32）。

こうした確信、あるいは一般的な緊張関係について言明しようと試みることが重要なのである。それは次の理由による。

> ある「状況」で公的、平均的、あるいは文化的に期待される行為と人間の現実の行為との違いが生じるが、その際には常にそこに個人的な解釈が生じたことが示されている（ibid. p.32）。

実際にはダラードは凋落がはじまってからライフヒストリー法について執筆している（このことがもたらした不運の一つはダラードの研究が正当な評価を受けなかったことにある）。1930年代に頂点に達した後、ライフヒストリーによるアプローチは地位を失墜し、しばらくの間社会科学者から捨て去られてしまう。その第一の理由として、統計的手法が強く喧伝され、社会科学者の中で多く用いられるようになったことがある。それとともにより重要だったのは、エスノグラフィ志向の社会学者の間でも、人間の行動を理解するための基礎として、個人誌よりも、状況がより重視されるようになったことがあげられる。

それが1970年代に「わずかな復活」（Plummer 1990）のようなものが見られ、とりわけ重要であったのは逸脱の社会学研究者によって再開されたことであった。こうしてボグダンのトランスセクシュアル（Bogdan 1974）、クロッカーズの盗品売買業者（Klockars 1975）、チャンブリスが優れた歴史感覚でショーの1930年の研究を再検討した職業窃盗家（Chambliss 1972）の研究が発表された。

このほかライフヒストリーの手法を再び活用した周辺的なグループに、アメリカのスタッズ・ターケル、イギリスのジェレミー・シーブルックやロナルド・ブリスのようなジャーナリスト的な社会学者と、いわゆる「オーラル・ヒストリアン」（Thompson 1978, 1988）と呼ばれる一群の人々がいた。ダニエル・ベルトー編『個人誌と社会』（Bertaux 1981）は、この研究手法を復権させる重要な一歩であった。この本の直後にケン・プラマーの重要な著作『生活記録の社会学』（Plummer 1983）が出版され（改訂版は2000年に出版）、ティアニーによる『質的研究』の特集記事も特筆すべきものである（Tierney 1998）。

フェミニスト研究者はとくに声高にこの研究方法の支持を主張していたが、それは主として隠された、あるいは「沈黙させられた」生活を表現し、賞賛できる手法だからであった（McLaughlin and Tierney 1993を参照）。ひっそりと公の場に出ることのない生活、大多数の女性が（そして大多数の男性もと言うべきだが）こうした生活を送ってきた（Personal Narratives Group 1989, Stanley 1990, 1992, Gluck and Patai 1991, Middleton 1997, Munro 1998, Weiler and Middleton 1999を参照）。同様にセクシュアリティ問題の研究者も、とくにプラマーやスパークスはこの研究手法を大いに使用してきた（Plummer 1995, Sparkes 1994）。

教育研究の領域ではやはり社会的な権力の問題では間違いなく周辺的な教師と生徒の研究においてライフヒストリーはとくに有用で適したものであると考えられてきた。というのもブーローが指摘しているように「教師は公と私を分けることができない…授業ではその人間性が表に出てしまう」（Bullough 1998 pp.20-21）。ライフヒストリーはそうした分離を必要とせず、

実際に全体性（ホーリズム）が求められる。教育を対象にしたライフヒストリー研究がますます増加していることはその証明になっている（たとえばBall and Goodson 1985, Sikes et al. 1985, Goodson 1992a, Casey 1993, Middleton 1993, Goodson and Hargreaves 1996, Osler 1997, Sikes 1997, Erben 1998b, Kridel 1998）。

こうした研究者たちは周辺的で、まとまった研究集団ではないが、ライフヒストリーの可能性を徹底的に再検討するための議論を展開している。とはいえ、ライフヒストリーの現代的な意義を述べる前に、ライフヒストリーがこのように長い間なぜ社会理論や社会調査、参与観察から退けられてきたのかを検討しておくことは重要であろう。なおその際強調しておくべきことは、ライフヒストリーを衰退させた要因のうち専門的、ミクロ政治学的、および個人的要因を取り除いた根本的な方法上の問題点を明らかにしなければならないということである。ただ、個人的要因は方法的な「パラダイムをめぐる戦い」による要因よりも、さらに重要な場合が多いのだが。

2　ライフヒストリーの衰退

1966年にベッカーはアメリカの社会学におけるライフヒストリーの状況を次のようにまとめた。「ライフヒストリーの科学的利用法がバラエティに富んでいることを考えると、今日ライフヒストリーが比較的軽視されていることに人々は驚くに違いない」（Becker 1970, pp.71-72、訳書14頁）。

社会学者は決してライフヒストリー全体を否定してこなかったとはいえ、標準的な研究手法の一つとして活用してもこなかったとベッカーは述べている。「社会学者は入手したライフヒストリーを読むし、学生たちに読ませるためにライフヒストリーを与える。だが社会学者は自分自身でライフヒストリー記録を集めようとは考えもしないし、その技術を調査方法の一部にしようともしない」（ibid. pp.71-72、訳書14頁）という状況が一般的であったし、それは現在も続いている。

ライフヒストリーが衰退した責任の一端はシカゴ大学社会学部にある。同学部では、1920年代の終わりから、ケーススタディ（そして、ライフヒストリー）と統計的手法のいずれを重視するかをめぐって対立がおこり、この過程でライフヒストリーは危機に瀕することになった。フェアリス（Faris 1967）はシカゴ社会学についての研究を行い、この議論に影響を与えた重大な出来事を次のように記している。

> この問題を検証するために、ストゥファーは、数百人の学生を被験者にして自伝を書かせ、とくに飲酒の経験や禁酒法についての感想はかならず記入するよう指示した。自伝は、ライフヒストリー調査に熟練した幾人かの審査員に読んでもらい、禁酒法に対する各々の被験者の態度が、一定の基準で度盛りされた評価線上のどこに位置するかを示してもらった。その結果については審査員同士の一致も図られた。以上の作業と同時に、被験者のそれぞれはサーストン尺度によって構成された質問紙に回答した。そして前述のライフヒストリーを基礎にした審査員の評価と、この尺度化された質問紙の回答結果が一致する、との結論に達した。実際この結果から、少なくともこの尺度スコアに関する限り、ライフヒストリーの記述とその判定に要した長くつらい作業はまったく必要がないほど、その尺度化は問題の内容を言い表しているとの事実が立証された（Faris 1967, pp.114-115、訳書164-165頁）。

ここでの実験はただ態度を測定するためだけになぜライフヒストリーを使うのかという問いに答えていないことに気づくだろう。インフォーマントの態度が「なぜ」ある特定の程度に達したのかの説明を、自伝的資料が含んでいることは疑いない。こうした情報は態度の測定以上に貴重なものになりえるし、さらにはアンケート調査では測りえないものだろう。

シカゴ大学で行われたケーススタディの分野においても、エスノグラフィの手法、とくに参与観察という別の手法によってライフヒストリーは衰退していた。このようになったのは、おそらく〈同大学の〉ブルーマーとヒューズの研究志向に原因があった。この二人の社会学者は、1920年代および30年代のシカゴ学派と、マッツァが「新シカゴ学派」と名づけたベッカー（Becker

1970）などへの橋渡しをした。ブルーマーのシンボリック相互作用論は、過程と状況をもっとも重視し、個人誌を用いた解釈、たとえば社会構造の影響力についての解釈にはひどく懐疑的であった。ヒューズの比較の手法による職業研究は、職業人が直面する定型的な問題や職業上用いられる戦術に関心があったため、個人誌への関心は限られたものとなった。加えてライフヒストリー研究で中心的な役割を演じていたシカゴ社会学の方法的折衷主義の衰退を促進したもう一つの要因として、シカゴ大学自体が社会学研究の中心から脱落したことも指摘しておこう。

ライフヒストリー法の命運は、社会学が学問として成立した歴史と複雑に絡み合っている。つまりこの研究手法の方法論上の問題が、抽象理論を発達させる必要に反するようになったのである。社会学が特定のコミュニティ、機関、組織について詳細な説明を行うことに強く関心をもっていた際には、その弱点は重大なものではなかった。しかし、社会学のライフヒストリーの観点から見れば、社会学が学問として抽象理論へと向かおうとする全体的な潮流は避けがたいものであった。このような動向にあっては、社会学者がほかの学問からの尊敬を得ようと望んだことも無理のないことであろう。その結果、社会学の主流派は「社会学者は自分たちが研究する人々にもっとも関連があると思われるカテゴリーよりも、自分の理論の抽象的カテゴリーの中で公式化されるデータ」(Becker 1970, p.72、訳書 14 頁)に固執するようになった。

抽象的、学術的な理論へと向かうことで、社会学的方法はさらに「専門的」になった。基本的に、それはベッカーが定義した「シングルスタディ」による調査モデルへと向かっていった。それは次のようなものであった。

> 私はこの「シングルスタディ」という用語を、自己満足的で、自己充足的と思われるような研究プロジェクトを指すものとして使っている。そうした研究プロジェクトは、それらが提出する結論を受け入れたり、あるいは拒否したりするのに必要なすべての証拠を用意する…。シングルスタディは以下のようにして知識の主要部に統合される。そのやり方とは、すでに知られていることから類推して仮説を引き出し、研究が完遂した後には、もしその仮説が証明されれば、それはすでに科学的に知られており、さらなる研究の基礎として用いられる煉瓦の壁へと付け加えられる、というものである。重視されるのは、調査者の仮説が一つの研究によって発見されたことを根拠にして、証明されるか否定されるかということである（ibid. p.72、訳書 15 頁)。

社会学研究がこうした形式に向かわざるをえなかったのは、社会学が新興の学問であるという特質とその組織の構造に明白にあらわれている。博士課程の学生は仮説を定義し、検証しなければならず、学術誌の論文は、著者自身やほかの学問的仮説を検証しなければならない。また研究計画では一般化しえる目的を述べ、証明しようとする課題の重要性を提示しなければならない。この支配的であった経験モデルは、ほかの科学から導かれて完成したものであり、社会学を完全に成熟した学問として制度化するためには重要なことであった。しかし、このことによって社会学は方法論やデータソースを十分に拡大することに失敗した。

> こうしたことのために人々は研究の別の機能を忘れ去ってしまった。そして、とりわけ問題であるのは、個々に考察された研究がそれ自体で完全な結果を出さない場合には、その研究のプロジェクト全体に対する貢献が無視されてしまうことである。この規準に照らした場合、ライフヒストリーからは完全な結果というものは得られないので、ライフヒストリーを利用することに困難をおぼえるようになり、人々はライフヒストリー記録を得るために必要となる時間や労力を費やすことをしなくなってしまった（ibid. p.73、訳書 17 頁)。

ベッカーは社会学者が将来的には「科学的研究の複雑さをより深く理解する」（ibid. p.73、訳書 17 頁）ようになり、このことがライフヒストリーを復権させ、1920 年代および 30 年代のシカゴ大学の社会学者によって生み出されたものと同じようにライフヒストリーの資料が精力的に生み出されるとい

う希望を提示して締めくくっている。

1970年のベッカーによる批判の後、社会学では「実証主義」、すなわち仮説検証モデルによって失われてきたものを再評価しようとする新たな方向性を示すものが多くなった（Morris 1977, Cuff and Payne 1979）。明確に個人誌を重視した方向であるバーガーとルックマン（Berger 1963, Berger and Luckman 1967）の現象学的社会学でも、実際には経験的研究はごくわずかにすぎない。

したがって解釈学的社会学の研究は、相互作用主義やエスノメソドロジーの影響によって、状況を非常に重視してきた。社会学の新たな方向は、「実証主義」モデルから遠ざかることにあったが、それは直接に特定の状況や時間に向かい、ライフヒストリーと個人誌は社会学の研究活動の外側に取り残されてしまいがちだという逆説的な結果となった。たとえば相互作用主義者の研究は、特定の状況における行為者集団にあらわれたパースペクティブや定義に焦点を当てる。その状況の背景には、直接的ではないにしても、行為者の潜在力を抑圧するある種の堅固な「構造」や「文化的遺産」が存在している。より決定的なモデルを求めて状況を重視することで、このような歴史的過程との繋がりを失ってしまうのはごく一般的なことである。こうして相互作用主義者が行為者にとって意味ある対象に関心を示す際には、その意味づけが個人の、あるいは集団の歴史によって行われたものではなく、特定の状況を処理するために集団によって行われたと見なされることがますます多くなってきた。

社会学のほぼ半世紀にわたる展開を見れば、ライフヒストリーという手法について数多くのことを知ることができる。まず社会学者は社会科学として一般化しえる事実と抽象理論の発展を真剣に追求しはじめたため、ライフヒストリーによる研究は重大な方法的欠陥をもっていると見なされるようになった。それに加えて、ライフヒストリー研究がたんに「物語ること」として発表されることが多く、そのような手法は「学問的」あるいは「科学的」実践として地位が低かったため、方法論として採用されることが少なくなってしまった。逆説的ではあるが、社会学の経験モデルへの対抗策が発達したときでさえ、相互作用主義とエスノメソドロジーという、いずれも個人誌や社会的背景よりも状況や特定の時間を強調する研究手法が採用された。さらにこうした新たな研究の方向は研究手法自体の地位の問題をともなっていたので、この点からもライフヒストリー研究は魅力的なものとはならなかった。グッドソンが初期ライフヒストリー研究をある研究会で初めて発表したとき、あるクラスルームの相互作用論の研究者は次のように述べてライフヒストリー研究を拒絶した。「私たちはこうした新しい方法論を提示すべきではないと思います…なぜなら、研究者としてのキャリアに障害となるからです。ああ！ エスノグラフィは今でも十分に地位が低いのです」（Goodson 1983）。

野心的な研究者、すなわち現在の研究者の世界で、そこで形成され秩序づけられたルールに従って成功しようとしている研究者のライフヒストリーに照らすと、社会学の発展のある段階ではライフヒストリーという手法が魅力的ではなかったことが容易に理解される。しかし1980年代にはライフヒストリー法を再び受け入れる方向へと事態は大きく変化しはじめた。

3　モダニズムからポストモダニズムへ

モダニズムの時代には、常に「客観性のテスト」に失敗し続けてきたため、ライフヒストリーの立場はみじめなものにすぎなかった。数値によって集約的に統計を示すことができず、研究結果も代表的や典型的と見なされるものではなかったため、理論への貢献もほとんどなされなかった。社会「科学」として認められたいというかねてからの念願により、ライフヒストリーは研究手法として採用されるテストに落第したのである。

しかしながらハーヴェイらが述べているように、「ポストモダニティの条件」下では新たなジレンマと新たな方向性が生み出された（Harvey 1989）。新しい可能性が示されることによって、それまでライフヒストリーの欠点とされていたものがひっくり返されることになった。客観性から主観性へと移行することで、ライフヒストリー研究に新たな期待がかけられるようになり、その結果、新たな研究が数多く発表された（Denzin and Lincoln 1994a,

2000を参照)。教育研究では近年になって研究報告が出されるようになったが、それは教育研究では新しい研究の方向が示されても、それに従うのが遅れてしまうことが多いからである。

ライフヒストリー研究はポストモダニズムやポスト構造主義への移行にともなって進行しており、そのことはとくに社会学研究、ジェンダー研究、カルチュラル・スタディーズ、リテラシー理論、さらには心理学で証明される。これらの研究により啓蒙運動で社会的に作られたとされるモダニストによる支配的な語り(マスター・ナラティブズ)から逃れることが容易になる。こうした移行にともなって、唯一無二で知覚できるかけがえのない自己という概念が個人主義により社会的に作られたものの一部であると見なされるようになり、自己とは進歩や知識の獲得を求め、さらには束縛からの解放を求める主体だと考えられるようになった。年代順に時間や物語が直線的に進むという仮定は、主観性というさらに多様で分散した概念によってその正当性が疑われるようになった。たとえばフーコーの研究は病院や監獄といった機関が私たちの主観性を統制し形成してきた方法に社会学的な注目を集めるようになった。同様に言説研究が着目してきたのは、他者の本質的な自己を「捉える(キャプチャ)」ための文字表現を生み出すことでアイデンティティが構成されているという言語の役割であった(Shotter and Gergen 1989)。

こうした社会学研究での新たな考え方はライフヒストリー研究を再び利用する方向に導いた。

> 現在のように人間の経験とは主観的で、多様で不完全な性格をもつものだと認められることで、ライフヒストリーの方法論が再興することになった。かつてライフヒストリーが批判される理由であった典型性の無さや主観的な性質は、いまやたいへんな強みになっている(Munro 1998, p.8)。

しかしすでに確立された自己や物語を揺り動かそうとするポストモダン的な関心に障害がないわけでない。マンローは次のように回顧している。

> 女性教師のライフヒストリーを収集する際に、自分が複雑な位置に立たされていることに気づく。人生を「収集」することなど出来ないことは理解している。語りは真実を突き止める上で良い方法になるわけではなく、実際、良い物語はすべてフィクションの出来の良さにかかっているということを改めて考えさせる。私たちは多様な人生を生きている。その結果、本書に収められたライフヒストリーは女性の人生を整然と表しておらず、また年代順に解説してもいない。そうしたことは裏切り行為、歪曲であり、これまで行われてきたように女性の人生を家父長制の話や概念、文化的な規範に「あてはめよう」とすることであろう。そうではなく、ライフヒストリーを理解すれば、話された内容と同様に話されなかったことに注意を払い、また話されたことや話されなかったことと同様に、それがどのようにして話されたかに注意を払う必要があり、さらには「その」物語を求めるがゆえにうわべを飾り立てようとする誘惑に負けるのではなく、対立や矛盾に注意を払う必要があることがわかる(ibid. pp.12-13)。

このようにマンローは、研究者や研究対象者が直面、混乱、そして困惑させられるであろう、方法論上の、そして実際には倫理上の危険地帯に言及している。ミシェル・ファインは対峙すべき問題について次のように述べている。

> 自己と他者はもつれて絡み合っている。こうした調査者とインフォーマントの間に存在するような関係は、社会科学の文献ではあいまいにされ、特権が維持され、距離が守られ、矛盾は覆い隠されるのが普通である。個人主義的な矛盾した議論や個人の勝手な論理で組み立てられた理論、さらに文脈の無視という方法を用いることにより、他者を目立たせ、自己を消そうとし、文章中に散在する矛盾の解決に取り組むことを拒絶するのである(Fine 1994, p.72)。

ファインの警告は、ライフヒストリー研究にかかわる者にとって、はかりしれないほど重要なものである。しかし結局のところ、私たちが作り出す論

文は矛盾などない閉じられたものでなければならないことを認めざるをえず、また一度閉じたものもすべて再び開き直さなければならないという循環に私たちは囚われている。ファインが警告しているように完全で首尾一貫したものを探し求めることは思い違いにすぎない。ライフヒストリー研究を書き上げるということは、まとまりからはみ出しつつあるものの一断面を切り取ることにすぎない。

さらには研究者とインフォーマントの関係は、「複雑、多様で矛盾した概念であるため主観を統一ある領域として認めることの拒絶」(Munro 1998, p.35) をポストモダンがとくに好むことに大きくかかわっている。インフォーマントが首尾一貫したまとまりを求めて自分の人生を語る際に、研究者がこのように主観の統一性を拒絶することはどのような意味をもつのだろうか。多くの人々がまとまりを求めて、すなわち統一された自己を得ようとして自分の人生について語っていることが問題となる。こうした自己の社会的構成はマンローの言うように「拒絶」するべきだろうか。拒絶はここでは問題とならない。というのもライフヒストリー研究は可能ならポストモダンの神を演じることを拒むべきだからである。ライフヒストリー研究の関心は人々が自分の人生についてどのように語っているかであり、どう語るべきかではない。ここでポストモダン原理主義とも言えるものを取り除いておかねばならない。

こうしてライフストーリーは研究のスタート地点となる。このライフストーリーは、その性格上、すでに人生の経験とは引き離されている。すなわちそれは解釈され、文章に起こされた人生である。ライフストーリーが表すのは現実の経験のごく一部であり、その中から選択されたものについて語っているにすぎない。フリーマンはここでとりあげている問題について次のように検討している。

> 私たちが手に入れるものは人生そのものではなく、人生のテクスト、すなわち人生がどのようなものであったかを一般的な形で詳細に記述しようとした文字による加工品である。このように考えると私たちは調査対象とする人生からは少なくとも一歩引き離されるだろうし、離れざるをえない。私たちが出来るのは、実際の人生を経験した者によって書かれたもの（あるいは関連するもの）に基づいて、それを解釈することだけである。
>
> 基本的なものは、これから検証しようとしている文書資料からだけではなく、インタビューやさらに一般的な人間行動の観察のようなものからも得られることを、とりあえず強調しておく必要がある。インタビューは、社会科学者がよく収集しているものだが、それ自体がテクストであり、また本屋で購入するものほど豊かな資料とはならないだろうが、それ自体が文字による加工品であって、言葉という形で経験の特徴ある一面を表している。人間の行動の観察についても、それは物語とほぼ同じものである。人間の行動は、時間を追って生じ、その結果には行動を起こした直接の事情以上の意味づけがされることも多く、それ自体がある種のテクストである。すなわちそれは数多くの意味をもっているため解釈せざるをえず、文献やインタビューと変わらないものである（とくにRicoeur 1980を参照）。いずれにせよこのように「書かれたもの」への簡単な考察をまとめれば、私たちが解釈をはじめる際の第一の出発点は人生そのものではなく、人生について話すために使われた言葉なのである（Freeman 1998, p.7）。

現実の経験を「ライフストーリー」へと変えることは、解釈を積み重ねることであるが、「ライフヒストリー」へと転換することは二次的な積み重ねであり、さらなる解釈を加えることである。かつてグッドソン（Goodson 1992a）が述べたのは、第一ステージであるインフォーマントが自分の「ライフストーリー」にかかわっている段階と、第二ステージである新たなインタビューや文書資料を数多く用いることで「ライフヒストリー」が構成される段階を区別することであった。ライフストーリーからライフヒストリーへの転換は先に指摘したように多くの方法論的、倫理的問題を抱えている。ベルトーが述べているように、個人のライフストーリーからライフヒストリーへと変化させることは手続き（プロセス）と権力関係の問題を抱えている。「本当に問題なのは社会学者と、人生経験についてのインタビューを受けることを了承す

ることで社会学者の仕事を可能にさせる人々との関係なのである」(Bertaux 1981, p.9)。

ライフストーリーからライフヒストリーへと転換させることは歴史的文脈の説明へと移行することである——たいへん危険な移行であるが、それは当然のようにライフストーリーを選別し、移動させ、そして沈黙させることで「位置」を決める「植民地化」のための強い権力を研究者に与えるからである。それでも私たちは「ライフストーリー」の読解に必要な歴史的文脈を作り出す必要がある。

ダネファーは発達に関する言説を研究する中で文脈がもつ多様な意味について記述している(Dannefer 1992)。ここでの私たちの関心はライフヒストリーも埋め込まれている社会の歴史と、さらには社会の地理をも包含しながらコミュニケーションをはかることである。すなわち時間と場所の問題について文脈とのかかわりの解説が加えられなければ、ライフヒストリーはそれが社会的に構成されている状況から切り離されたままである。このことはとくにライフストーリーよりはライフヒストリーに関する議論になろう。

文脈とのかかわりを解説することにより植民地化される危険性があることに関して言えば、ポスト構造主義者もライフストーリーからライフヒストリーへの移行に関心を向けるようになった者が多く、さらには時間と場所の文脈が変化し続ける環境の問題に対処しようとしている。たとえば女性教師の生活に関する初期のミドルトンの研究では第二次大戦後のニュージーランドという特殊な社会文化的状況でのフェミニスト教員の教育活動を現実に即して説明している(Middleton 1992)。同様に、明白なフェミニストのポスト構造主義者であるマンローは次のように論じている。

> 本研究の関心は広い歴史的文脈に女性教師の人生を位置づけることにあるため、女性教師が教えていた地域やその当時の歴史的資料も収集された。私は教育史家ではないが、女性たちが生きた地方の歴史とさらに広い歴史的文脈の双方を理解しようと試みた(Munro 1998, p.11)。

このようにライフストーリーや語りはライフヒストリーと大きく異なっている。文脈に関する資料を用いることで、ライフストーリーは社会的に構成された証言や行為がなされた時間と場所により多様な影響を与えられるものという視点で見ることができる。

本章の目的はライフヒストリー法の発達とその活用を広く概観することにあった。本章であげた問題点やテーマは、次章以降で再びとりあげることになろう。さて、次章では実践的な問題を考察し、ライフヒストリーを実践するための技術を検討しよう。